



いれずみ物語

— 14 —
小野 友道

風呂といれずみ

— 寅彦も、芙美子も驚いた —

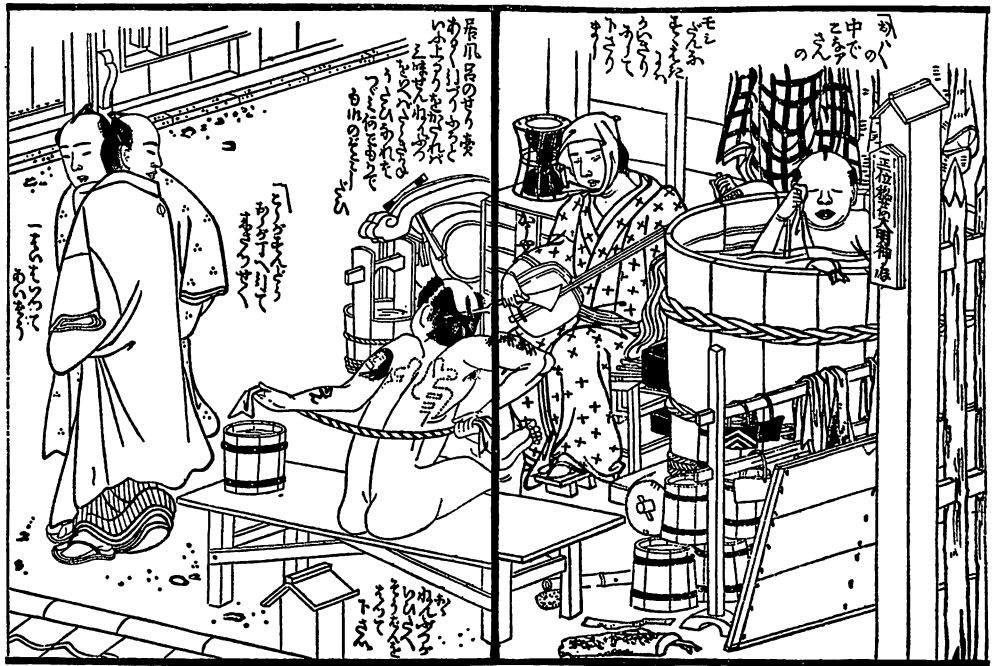
背中一杯のいれずみを、素人が垣間見る機会はほとんどないが、それでも3、40年前までは、銭湯でそれに出会うことがあった。その昔、「京阪では銭湯でも極く稀にしか見る事が出来なかったが、江戸では銭湯へ行けば必ず数人の文身ある者を見る事が出来た。従って江戸の人達は銭湯で文身のある人を見ても別に恐れると云う事はなかった。しかし、京阪では文身の者を見ると皆、恐れて近寄らなかつた」(玉林晴朗)という。日本のいれずみ(彫り物)は秘匿が生命だが、一方で、「刺青をする人は明らかにエクスピションニズム(露出狂)の傾向がある。そうでなくては、お祭りに禪一本で御興を担ぐわけがないし、内風呂があるのにわざわざ銭湯に出かけるのも、自分の肉体上の芸術を人々に鑑賞して貰うためであろう」と喝破したのは飯沢 匡であった。飯沢の『蛇頭の紳士』の中で、主人公K氏が5歳の時、若い井戸掘り人足で全身彫の偉丈夫を見た。彼は裸で「寒い風の日で大蛇の刺青を全身にして、井戸の中に消えて行った」、その若者にK氏は強く憧れた。7、8年後、塾帰りの通り道である色町で、かの大蛇の刺青の英雄に出会った。「井戸掘り人足は出世したというのか、その時は色町の中の一

軒の女将のヒモになっていた。刺青者の通有性の自分の刺青を誇示するつもりで銭湯の帰り、衣類はまとめて小脇に抱え禪一本で家まで帰るところであったのだ」「明日はもっと早く算術の先生の家を出てこの銭湯で入浴すれば彼に、ゆっくり会えると思った」「そこには色町の中の風呂屋のことなので刺青をした男が多勢、入浴しに来た。少年は、これらの男の傍に行き、その肉体に施された装飾画を念入りに眺めた」が、その大蛇には巡り会えなかつた。

*

お風呂でのいろんないれずみとの出会いがあるが、子供のときの経験はいずれも鮮烈だ。

寺田寅彦は『げじげじとしらみ』という随筆の中で、「父は満五十歳で官職を辞して郷里に退隠した。自分の九歳の春であったと思う。<お父さんはげじげじだよ、げじげじだよ>と言って」いたという。「当時陸軍では非職のことを<げじげじ>という俗称が行われていた。<非>の字の形がげじげじの形態と似通っているためである」そして、次にしらみである。郷里へ帰る途中、あけぼの旅館の2階から乞食のしらみ取りを見る。「きたない着物を引っばって何かしら指の先でつまみ取り、そうして口



『江戸入浴百姿』より転載（花咲一男著、三樹書房）

へ運んでは嘔み潰している光景を」スケッチしている。さらに小田原の「本陣」の風呂でいれずみに出くわすのである。「げじげじと泥坊（引越し直前に入った泥棒—筆者注）、泥坊からしらみを取って食う鍛冶橋の見付の乞食、それから小田原の倶梨迦羅紋々と、自分の幼児の〈グロテスク教育〉はこういう順序で進捗していった」と回顧し、こういう一見はなほだいがわしいグロテスク教育も、美的教育と相並んで、少なくとも自分の場合においてはかなり大切なものであったように思われて来るのである」と述べている。芸術とさえ言われている日本のいれずみ、いや彫り物をげじげじやしらみと一緒にされてはたまらないが、幼い折の寅彦のショックが表現されている。それがどんないれずみだったか。さすが将来の物理学博士、びっくりしながらも大きな目を見開いて観察していた。

「宿の浴場で九歳の子供の自分に驚異の目を見はらせるようなグロテスクな現象に出くわした。それは、全身にいろいろの刺青を施した数名の壮漢が大きな浴室の中に、言葉どおりに異彩を放っていたという、生来初めて見た光景に

遭遇したのであった。いわゆる倶梨迦羅紋々ふうのものもあったが、そのほかにまたたとえば天狗の面やおかめの面やさいころや、それから最も怪奇をきわめたのはシヴァ神の象徴たるリングのはなほだしく誇張された描写であった」とその記憶はきわめて鮮明である。

一方、刺青作家と呼ばれた高木彬光は、就学前の幼いある日、母親に連れられて町の銭湯に行き、「あざやかな女の刺青を見た」「その時出会ったその女—若い女ということはおぼえているが、もちろん年ごろなどはおぼえていない。顔の美醜も記憶にはない。まして服装などにおいておや、銭湯の中での断片的な記憶にすぎないのだから。それが幼児性欲というものなのかも知れないが、その刺青のあざやかな美しさは、それから成長するまで、わたしの脳裏にやきついたままはなれることもなかった」と、そして寅彦と同じく「両腕に牡丹、背中には傘を持った小野道風に蛙という本格的な大物」と記憶の確かさが、印象の強烈さを表している。しかし、寅彦と異なり、高木はその美しさにとらわれてしまうのだ。

林 美美子の場合も強烈である。小学校もやめて、親の行商について、「大正町の馬屋という木賃宿に落ちついたのが七月で、…或る日、この指のない淫売婦と私は風呂に行った。ドロドロの苔むした暗い風呂場だった。この女は、腹をぐるりと一卷にして、臍のところに朱い舌を出した蛇の文身をしていた。私は九州で初めてこんな凄い女を見た。私は子供だったから、しみじみ正視してこの薄青いこわい蛇の文身を見ていたものだ」と、目をぱちくりさせながらも、興味津々観察している。

寅彦、高木、そして美美子の子供のときの感じ方はそれぞれ異なるようだが、それはいれずみのせいばかりではなく、それぞれの幼いときからの感性の違いも大きいのだろう。筆者も背中のいれずみを最初に見たのは銭湯だった。その経緯は拙著『人の魂は皮膚にあるのか』で述べたが、大学生の頃、下宿の近くの銭湯で、のんびりした日曜日の昼の空いた時間であった。背中全体の二人を見て凍りついた。大学生の私には、観察する余裕などなく、熱いお湯の中で鳥肌が立っただけである。しかし、またゴルフ場のお風呂で、10人ほどの背中のいれずみの人たちの中に、一人飛び込んでしまった人の話を読んだことがある。ずらっと並んだ背中のいれずみに、怖いというよりも、一人、背中にいれずみを背負わないでいる自分に対して情けない気分になってしまったというのだ。人それぞれである。

*

いれずみを入れる際にも、風呂は欠かせない。女郎蜘蛛を背中に彫った娘に、清吉が「まあ、これから湯殿へ行って色上げをするのだ。苦しからうがちツと我慢をしな」…「ああ、湯が滲みて苦しいこと。…親方、後生だから妾を打捨つて、二階へ行って待って居てお呉れ、私はこんな悲惨な態を男に見られるのが口惜しいから」という会話が、谷崎潤一郎の『刺青』にある。名人彫芳に彫ってもらった芝崎泰男によると、「当時は、五日に一回、月に六回の割で彫ってもらった。なか四日を置くのは、次に彫られる日迄に、脹れやかさぶたがあらかた

れ、彫った後がきれいに治るまでの間隔にほかならない。ほかしや色を刺れた時は、特に滲出液が多く出るので、彫った後、風呂に入った、湿布をして良く拭き取り、各人の体質にあった薬を塗らねばならない」らしい。北崎源次郎（世界一入墨保持者との肩書き）が「入墨経験談」を『風俗研究』（1934年10月号）に載せた。「その痛さはチクチクと痛んで堪へられませんが、直ぐに風呂へ入ります。するとその瞬間は一層痛いのですが、暫くすると今迄の痛みが止まって大い痛（原文ママ）となります」と書いている。いずれにせよ、風呂はいれずみの仕上げに欠かせない。

玉林は「文身のある連中は強さうだが熱い湯へ入れない。大衆小説等にはよく江戸っ子の文身を彫った勇みの連中が朝湯へ入りに来て熱い湯の中に入るのを自慢にして居る話しが書いてあるがそれは大違ひのなんとやらで文身のある連中は銭湯へ行っても朝湯などの熱いのはからっきし意気地がなく大分難儀をする」という。

一方で、風呂に入れないと悩む者がいる。いれずみを取ってほしいという理由はいろいろあるが、かなりの頻度で、子供と一緒に風呂に入れないからというのがある。中には子供が高校生になるまで、1回も子供と風呂に入らなかった親父もいた。それで、手術していれずみを除くことになるが、折角の皮膚にさらに傷が深く加わる。そんな人たちに、「朝湯こんこんあふるまんなかのわたし」と詠んだ山頭火のように、周りに何も遠慮せず、ゆったり、のんびりお風呂を味わってもらいたいと願うが、世間はなかなかむずかしい。

(熊本保健科学大学・学長)

文献

- 1) 北崎源次郎：入墨経験談、風俗研究、173号、1934。… 磯川全次『刺青の民俗学』、批評社、1997。より引用。
- 2) 小宮豊彦編：『寺田寅彦隨筆集 第四巻』、岩波書店、1948。
- 3) 芝崎泰男：彫芳刺青を背負った動機と出会い【増補普及版 日本刺青藝術 彫芳】、日本刺青研究所、人間の科学新社、2002。
- 4) 高木彬光：生きている芸術、【増補普及版 日本刺青芸術 彫芳】、日本刺青研究所、人間の科学新社、2002。
- 5) 玉林晴朗：『文身百姿』、日本刺青研究所、1987。
- 6) 林 美美子：『放浪記』、新潮文庫、1979。